

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集  
第 56 集 (2023年度) 2023年 7月発行 : 139-145

## 大学でおこった大騒動の思い出

山 田 圭 一

大学がおこつた大騒動の型は出

② ~~学園騒動~~

山田圭一

1968年~~(5.43)~~から29年にかけて  
 全国の大学で荒れ狂ったデモや学園封鎖は、  
 今になってみると一体何だったのかという思  
 いを捨て切れぬ。確かに学生の方から見れ  
 ば大学“斗争”だったのかも知れない。 ~~無~~  
~~疑~~に大学が ~~またまた~~側からはそれが“紛争”  
 と呼ばれて来た。しかし私はどちらにも同  
 調する気にならず、単に“騒動”としか呼ぶこと  
 ができずにいる。出来て

開

基本的にこの ~~事件~~ <sup>出来て</sup>には二つの抗議行動が結  
 びついている。その一つは1952年の第一  
 次安全保障条約改訂への反対運動に引き続い  
 て、10年後に ~~新~~安保条約への激しい抗議運  
 動 ~~が行われた。~~ <sup>である</sup>

私自身は前者は <sup>の頃</sup>にはまだ学生で、東大  
 のガレージ一人としてデモに加わっていた。  
 そして明治神宮外苑広場で行われた中央大

## 大学でおこった大騒動の思い出

山田圭一\*

1968年から69年にかけて全国の大学で荒れ狂ったデモや学園封鎖は、今になってみると一体何だったのかという思いを捨てきれない。確かに学生の方から見れば大学“闘争”だったのかも知れないが、大学の側からはそれが“紛争”とされて来た。しかし私はどちらにも同調する気になれず、単に“騒動”としか呼ぶことができずにいる。

基本的にこの出来事には二つの抗議行動が結びついている。その一つは1952年の第一次安全保障条約改訂への反対運動に引き続いて、10年後に行われた新安保条約への激しい抗議運動である。

私自身は前者の頃にはまだ学生で、東大のグループの一人としてデモに加わっていた。そして明治神宮外苑広場で行われた中央メーデーの後に、皇居前広場になだれ込んだデモ隊が、突然警棒をふるった警官隊に襲われ、私達は拳銃の発射音に逃げまどうことになった。

次の1960年安保闘争の時には、東大教官団の一員であったが、新安保条約が自然承認された最後の夜には、議会近くに設けられていたセンターにつめていた、リーダーの丸山真男教授の指示で、デモ隊の最前部にいたグループのリーダーに、何としてでも相手の挑発にのらず暴発を防ぐように、というメッセージを届けに走ったりして夜を明かすことになった。

いずれにしても、そのまた十年後を意識しての運動は、1968年10月の国際反戦デーに全国600ヶ所で行われた集会とデモにつづいて、新宿駅などでは全学連学生による突入、占拠、投石、放火などの大混乱が引き起こされていた。

他方このような運動と並行して、幾つかの大学でも激しい抗議運動が始められていた。

とりわけ1968年4月に国税庁が発表した、日本大学の経理に20億円もの使途不明金があったという問題について、相次いで大規模な集会やデモが始められた。その後学部ごとの無期限ストからバリケードによる大学封鎖と抗議運動が激化して、機動隊が学外の一般道路で5,000人もの学生に対して催涙弾やガス弾が発射されるというような騒乱状態にまで騒ぎが広がって行った。

これとは別に、東京大学でも同年1月に医学部で登録医制度に反対して始められた無期限ストと、医局長缶詰事件に対する処分問題が口火になって、これも全学的な抗議運動が拡大して、卒業式の中止、安田講堂の占拠、機動隊の導入などますます深刻な事態が拡大されていった。例えば安田講堂の機動隊による封鎖解除だけでも、8千5百名の隊員が動員される騒動になってしまった。

しかし私自身は既に東京工業大学に転出した後のことで、さまざまな事件については新聞やラジオで知っただけに止っている。

そして、警察側の行動については、佐々木淳行氏の「東大落城」という詳しい報告があるし、学

---

\*筑波大学名誉教授

生側や中立の立場からも、いろいろな記録が残されているので、ここでは改めて取り上げる必要はない。

しかし、東工大で起きた事件について、大学執行部がどのように対応したのかについては、殆んど知らされていなかった。そのため、当時所属していた社会工学科で起こったことについて、まだ記憶している幾つかのエピソードを記しておくことにする。

抗議行動が、たちまち燎原の火のように全国の多くの大学に燃え広がり、東工大でも寮の自主管理と寮規制の撤廃をはじめ、いくつかの要求が執行部に突きつけられた。私も一度は大講堂を埋めつくした学生達が、壇上に並んだ学長や学部長に、怒声を浴びせて吊し上げる光景に立ち会ったことがあった。

そして、学科ごとに開かれた集会には、もちろん毎日参加した。そして、たとえば教官側は、寮の自主管理について、この建物が国有財産で、大学側に管理責任があるという立場を崩さなかったが、ほんとうの理由は、もし自主管理を認めれば、たちまち寮が過激派学生の巣になってしまうということであった。

そして、他にも幾つかの要求事項があったが、社会工学科のスタッフは学科としての統一見解をまとめようというような気は全くないので、学生側の幾つもの要求に対して、全員が拒否することはあっても、テーマによっては教官側の内部でも意見が異なっていて、お互いに議論を始めたたりすることもあって、とても学生側の歯が立たなかったようであった。そして要求のうちの一つとして、教育の改革ということがあって、その内容はカリキュラムの編成と講義内容などを、学生側の要求通りにすることであった。もちろん、この点に関しては、当然執行部も断固拒否していて押し問答が繰り返されていた。

しかし私としては、原則論ではらちがあく筈がないので、出来るならやってみようという作戦に切りかえることに決めた。もちろん、授業の自主管理を認めるわけにはいかないのですが、当時担当していた「産業計画第二」という講義をゼミ形式に変えて、学生にレポーターをしてもらうことにした。多分学生達は、やっと厚い壁の一部を切り崩したぐらいの宣伝はしていたことと思うが、いざ教壇にレポーターを立たせてみると、最初の時間は毛沢東の思想とかいうテーマで、彼の「予備論」などの著作の紹介を始めたが、こうなれば攻守ところを変えて、いくらでもレポーターを吊し上げることができた。

スタッフでさえ毎日の講義の準備にずいぶん苦勞しているのに、デモの片手間にまともなレポートができるわけがない。そんな訳で、二回か三回レポーターが交代しただけでこのゼミは自然消滅してしまい、その後執行部に対しても、教育の自主管理という要求は全く消えてしまったようである。

もう一つよく覚えている出来事は、学内でのお花見である。学生のやり方がエスカレートして、とうとう大学が封鎖されることになっていて、工学系の学生だけに、正門前に山のように机と椅子を積み上げて、それを太い針金でしっかり縛りつけ、やっと人ひとりが通れるだけの隙間しか残されていない。そのうちに春が来て、桜が咲き始めると、学校には正門から本館まで太い桜の並木があって、毎年わざわざ外から見物に多くの人に来る程見事に咲き誇っている。

この年に限ってこの桜を見ないで済ませるのは残念なので、過激派の学生たちに暫くの間休戦して、花見の宴会をするように申し入れた。もちろんそのためのお酒とおつまみはこちら持ちという条件つきである。

封鎖した学内で退屈して困っている彼等も、この条件ばかりは何も文句をつけず、双方の意見が一致した。ある日、日本酒やビール、ウイスキーを持ち込んで、20人を超える敵同志が久しぶりに旧交を温め合った。そして私自身はほどほどのところで引き上げたが、その後籠城組からも参加者が増えてかなりにぎやかな会になったそうである。

後日この“事件”を知った執行部は、多分けしからんことをしおつたと怒っただろうし、ことによると社会工学科の教官達は、過激派と一脈通じているのではないかと疑ったかも知れない。

しかしこのようにしてお互いの間のコミュニケーションを絶やさなかったことが、東工大の一部過激派の学生達も、あまり暴力をふるったり、校舎を破壊するようなことまでしないですんだ一つの原因になっていたのではないかと思っている。

また、学生たちに対する配慮ということでは、写真が大好きな私も、騒ぎの期間中全くカメラを持ち歩かなかった。デモに参加している学生たちが白いタオルで覆面しているのも、顔を知られては後で処分の対象になるかも知れないという警戒心のためであろうし、バリケードやプラカード、立て看板などの記録をとられても困る筈である。

ただし、アジビラだけは一体何が起こっていたのかを知るために、後でゆっくり読む機会があるかも知れないと考えて、かなり丁寧に集めていて、それがダンボール一箱分にもなったが、これも数年後に中味を見る気にもならず、ゴミ収集車に渡してしまった。

もう一つの出来事は、日本大学の問題が解決して授業が再開された工学部で、私が最初の講演者として選ばれたことである。

飛行機とアルプスの両方について長い間大変お世話になってきた、同大学教授で東大名誉教授の佐貫亦男先生から、少し遠慮がちの電話があった。そして、工学部で再開される最初の講義を私に、ということだった。先生としても、確かに大学と先生の双方の間で了解されたこととはいえ、まだ充分納得しない一部の過激派の学生が“授業再開絶対反対”と叫んで乱入して来るかも知れないという心配があったようである。

また、私の研究室でも、「こんな時に行っても大丈夫ですか」と引き止めてくれた人もいたが、私としては、きっと私の『現代技術論』を読んでくれた学生諸君が、それを評価してくれたことと、即座に、「喜んで何う」と返事をした。

当日は、大講堂の入口の両側には、背の高いジェラルミンの箱が並べられていて、狭い通路から入ってくる学生の一人一人の学生証や持ち物をチェックするといったものものしい警戒ぶりであった。しかし、広い講堂を殆んど埋め尽くした学生諸君は、野次一つとばすことなく静かに私の話を聞いてくれた。その内容は詳しくメモに残していないが、自然を征服するのではなく、自然と人間との調和を保った技術、ということや、当時注目されていたテクノロジー・アセスメントの考え方を紹介しながら、新しい技術の開発が人間とその社会にどのような影響を及ぼすのかについて、一つのシステムとして総合的に検討しておく必要のあることなどに触れた後、これからの技術のあり

方について、機械の性能を上げるとかコンピューターの計算速度を速くするといった狭い意味での進歩を追い求めるだけでなく、先ずそれぞれの人間がどのような生き方を望んでいるのかを十分に考えた上で、そのために必要な技術に取り組むべきであることを結びの言葉にして、講演を終えた。

ところで、はじめにも書いたように、今になっても、どうしてこの激しい騒動が僅かの間に全国の大学に広がって行ったのかについて、釈然としない思いも抱き続けている。そして、確かに日大と東大での抗議運動にははっきりした理由があったにしても、その他の大学の多くについては、それ程の必然性があったとはとても考えられない。

たとえば、学生達の要求をみても、大学ごとにいろいろなものがあって、少し意地悪く言えば、他の大学があれだけ頑張っているのだから、うちの大学でも何かやらなければという気持ちの方が先立っていて、いいがかりに近いものとか考えられないケースが多かったようである。

たしかに、それ迄の大学のあり方については、いろいろ批判されるべき欠点があったことは事実でも、学生達の大学改革の要求リストを見ても、どれだけ問題をはっきり認識していたかどうかにについては、かなり疑問である。そして、東京大学を解体するとか、その他大学の現行のシステムを破壊するというだけに止まっていて、その後にもどのような改革をするかについては、ほとんど具体案を提示できてはいなかった。もちろん大学とその背後にある社会全体のあり方について、真剣に取り組もうとした学生が多かったことは確かであるが、太平洋戦争が終った後に生れた団塊の世代が、長い間悩まされてきた、満員電車で押し込まれたような圧迫感と、同じような年令層の中で激しい競争にさらされて来た強いストレスが、このような形で一挙に爆発したということも大きな原因の一つになっていたにちがいない。

事実、大学でのさまざまな抗議集会—というよりも教官を吊し上げる場で、先頭に立ってどなりまくっていた学生の顔が引きつって目尻を吊り上げていたことを覚えている。しかし、私達の世代は、戦時中の一億総決起といったいわば集団催眠の状態は十分経験させられて来ている。そしてこれはオイルショックの時のトイレットペーパーの買い占めとか、バブル時代の土地や株価の急騰などその後も何度も繰り返されて来た現象の一つである。

この騒動は大学側にも深刻な打撃を加えたが、東工大の場合も、永井道雄教授（後の文部大臣）や川喜田教授をはじめ、かけがえのない何人ものスタッフを失ってしまった。

そして、たしかに幾つかの大学では学生側と大学改革についての申し合わせをしたようであるが、それもどれだけ実現したかわからない。また全体的に見れば、改革よりは現状を守ろうとする保守化の傾向の方が強くなっていったように思われてならない。

とりわけ社会工学科にとって大きな痛手になったのは、東大の都市工学科の学生同様、社会的問題に強い関心を持っている社会工学科の学生が、この運動について最も過激で先導的な役割を果たしてきたこともあって、永井・川喜田教授をはじめ何人ものスタッフが数十回も会議と説得を重ねて、やっと教授会で正式に承認された社会工学部構想がうやむやのうちに葬り去られてしまったことである。

それに比べて、大多数の学生は機動隊の導入によって封鎖が解除されてからは、まるで憑き物が

落ちたようにおとなしくなってしまった。そして彼等は、ついこの間まで悪しき資本主義社会の代表のように激しく攻撃しつづけてきた大企業に、何の抵抗もなく就職していったのである。

数年後のある日、最も激しく大学を糾弾していた卒業生の一人であるC君が研究室にやって来た。「在学中に先生には大変御迷惑をかけたので、そのお詫びのためにご馳走させて下さい」ということであった。私の「もっと君が偉くなってから、その頃に」という皮肉も通じないので、近くの自由ヶ丘のレストランに行くことにした、そこで彼は、理科系の出身者は出世しにくいことなど、いろいろな不満をいいながら「東工大の出身者がなかなか偉くなれないのは、英語がうまくないため、これから何とかしてください」などと云いはじめた。そして、こちらは、あの頃こんな学生に苦労させられていたのか、と改めてあきれられる思いをさせられたのである。

後日、このC君の父親も大会社の重役であることを知ったが、東大をはじめ主要な大学の全共闘の最も過激な運動家たちの中で、父親が大企業の幹部であったり、高級官僚であるケースが少なくなかったと聞いている。そして、東大の安田講堂で最後まで抵抗して逮捕された377名のうち、東大生は僅か18名しか含まれていなかったということも強く記憶に残っている。

いずれにしてもこれだけ騒ぎを引きおこした学生達は、就職してからは、その後にも、何度も彼等に抗議のため立ち上がってほしい機会があったにもかかわらず、彼らはまるでガス抜きをすませたようにおとなしくなってしまう、さっぱり頑張ってくれなかったのは何故だろうと思うことがしばしばである。